

進化論教育という犯罪

——ダーウィン=ヘッケル進化論の正体と統一思想——

渡辺 久義

わが国のある生物教科書に次のような記述がある：——

生命の起源——地球上での無生物からの生物の発生をいう。現在では科学がめざましい進歩をとげているので、ある程度は生命に起源について推論できるようになってきた。(1)

この文章は、我々の文化がどういうものであるかを短く象徴的に物語っている。まず、生命の起源という畏怖すべきものを、畏怖などというものを全く知らない精神が問題にしている。次に、生命は物質から「発生」するのが当然で、それ以外に考え方はありえないという前提に立っている。更に、その前提に立って研究を進めていけば、いつかはきっと生命起源の謎は解明できるはずだと考えている。

要するにこの記述は、典型的に唯物論的文化（精神構造）の産物であるが、これを書いている本人は、自分の発言に何か問題があるなどとは夢にも思わないであろう。それが唯物論文化の特徴でもある。こう考えるのが間違いだとは言わない。ただ、これは一つの考え方——人類史から見ればきわめて例外的な考え方——だという自覚が全くないのが問題なのである。

生命の起源という問題は、おそらく統一思想の「一元二性論」、すなわち神の中で統一的に存在する心（性相）と物質（形状）が、現実世界でいったん別々に現れ、それが共鳴を起こして再統一される現象としてでなければ、理解しようがないであろう。しかしこれについては今これ以上述べない。

ところが我々の生物の教科書（少なくとも検定教科書）は、すべてこの引用文のように、何の疑問もありえないかのように、唯物論的に生命や生命の歴史を扱おうとする。これを科学の方法としては自然主義と呼ぶこともある。自然主義とは、自然界で起こることの原因のすべて——その存在自体の原因も含めて——は自然界の内部にあるとする科学者の前提（たいていは無自覚の前提）のことである。現在のところ、自然主義だけが学問の唯一正統の方法（かつ哲学）とされ、生物学の世界では、自然主義をとるダーウィン進化論だけが公認理論となっている。

しかしダーウィン進化論は誰の目にも明らかに、理論として欠陥があり、その論理は強弁^{カウ}というべきものである。これに対する長年の潜在的な不信が、近年、堰をきったように表に現れてきた。それがここ数年前来、大きな話題となり勢力となりつつある、アメリカの科学者の間から起こった「インテリジェント・デザイン」運動である。学問の世界にそのようなことがあるとは容易に信じられないことだが、ダーウィニズム体制を批判するの

は長い間タブーであった。近年ようやく、ID（インテリジェント・デザイン）運動の火付け役となった Phillip Johnson の『裁かれるダーウィン』（*Darwin on Trial*, 1993）から始まり、Antony Latham の『裸の王様——暴かれたダーウィニズム』（*The Naked Emperor: Darwinism Exposed*, 2005）などという本が出る（出せる）ようになった。

ところで、こういったダーウィン体制から生まれ、青少年教育にとって深刻なのは、慣行化している生物教科書の欺瞞・隠蔽である。これも信じられないことだが、進化を証明すると称するニセの証拠が長年にわたって堂々と掲載され、現在に及んでいる。これを指摘したのは、ID運動の中心人物の一人 Jonathan Wells の『進化の聖画像』（*Icons of Evolution*, 2000）だが、ウエルズは「科学は今、ダーウィン理論の柱となっているものの多くが、虚偽あるいは人を誤らせるものであることを知っている。しかし生物の教科書は、相変わらずそれらを進化の現実の証拠として掲載し続けている。いったいこれは理科教育方針の何を意味するのか？（2）」と、驚きとともに警告を発している。我々はウエルズとともに、「いったいこれはどうなっているのだ？」（*What's going on here?*）と叫ばざるをえない。

ウエルズは、欧米や日本の生物教科書に共通する 10 項目ほどの欺瞞を取り上げて論じているが、今ここで私は「生物学上の最も有名な偽造」と言われながら、学生は何一つ知らされることなく、教科書が昔から載せ続けている、そしておそらく誰にも覚えのある、あのヘッケルの胚の比較絵を取り上げてみようと思う。

今、私の手元に 6 種類の現行の高校教科書「生物Ⅱ」があるが、そのすべてがヘッケルの胚の比較絵を載せ、彼の有名な「個体発生は系統発生を繰り返す」という「法則」に何らかの形で言及している。説明文の方は、かなり大胆にこれを真理として解説するもの、言葉を濁して断定を避けるものと、多少の差はあるが本質において全く変わりはない。絵の方もわずかに違いはあるが、ほとんど変わりはないと言ってよい。

教科書の絵

その一つ（東京書籍）の説明文にはこうある——「個体の発生過程を生物の間で比較すると、その初期の形態がよく似ていることがある。例えば、ヒトの胎児にも鰓^{えら}や尾に相当すると考えられる構造が現れる。これも、生物が共通の先祖から進化したことを示す証拠と考えられる。」

この説明は「ことがある」「と考えられる」と言ってぼかしているが、絵は明らかに鰓と尻尾を持ったヘッケルの 130 年前（1874）のものをそのまま使っている。ヘッケルの「初期の胚」の絵が作為的偽造であることは、ヘッケル（Ernst Haeckel 1834–1919）の生存中から知られており（決して不注意や解剖の未熟によるものではない）、彼自身それを認めているにもかかわらず、これが欧米や、もっぱらそれに追随する日本などの教科書に載せつづけられてきたということは、まさに世紀の謎というべきであろう。

これを Michael Richardson による現実の胚の写真 (1997) と比較してみれば、そのあまりの違いに誰も驚くであろう。(ウエルズはこれが「初期の胚」だということ自体、間違いだと指摘している。)

リチャードソンの写真

リチャードソン自身、「ヘッケルが白状しているにもかかわらず、…その絵は存続している。これこそ本当のミステリーだ」と言っているという (*New Scientist*, 9/6/97)。彼はまたこうも言っている——「これは科学界の偽造の最悪のものの一つだ。偉大な科学者と思われていた人物が、故意に人を誤った方向へ導こうとしているのを知るのはショッキングだ。私はこれには腹が立つ。」 (*The Times* (London), Aug.11, 1997, interview with Nigel Hawkes) (3)

私が調べたかぎり、ダーウィニストも含めて誰一人として、ヘッケルの「初期の胚」の絵 (版画) に問題がないと言っている専門の学者はいない。誰もが故意に手を加えたものであることは認める。ただダーウィニストが口を揃えて言うのは、「たとえそうであっても、ヘッケルが証明しようとしたことは正しい (から許される)」ということである。ウエルズに反論する有名なダーウィニスト P. Z. Myers も、反 ID 闘士の Eugenie Scott 女史もそう言っている。また大御所的ダーウィニストの (故) Stephen J. Gould も、「大多数ではないにしても、多くの現代の教科書で、このような絵が存続することになった一世紀間の無神経な反復使用に対して、我々は驚くとともに恥じ入るべきだ」と認めた。しかしそう言いながら、「自分はそんなことは何十年も前から知っていたが、それを指摘する Michael Behe はクリエーションист (反科学的聖書盲信者) だ」と言ったという。(4)

忘れてはならないことは、生物の教科書を学ぶものの圧倒的多数は生物学者にはならないということである。従って特に興味をもって自分で調べてみようとしないうち、我々の大多数は、専門家がひそかに知っている真相を知らないまま、つまり騙されたまま一生を過ごすのである。容易に想像されることは、これが墮胎に影響を及ぼすだろうということである。この絵が頭の隅にある女性は、胎児など魚のようなものだと、墮胎を軽く考える方へ傾くだろう。「何百万という無力な、生まれる前の子供たちの殺戮に対する、あるいは少なくとも、それに疑似科学的な根拠を与えたことに対する責任は、この発生反復説という偽りにあると、我々は正当な理由をもって主張できる。」 (Henry Morris) (5)

発生反復説、すなわち我々の教えられた「個体発生は系統発生を繰り返す」という格言的「法則」に、全く根拠がないという専門学者の証言は、それを証明するヘッケルの絵が偽造だという指摘とともに、枚挙にいとまがない。

そもそもヘッケルは胚の絵にかぎらず、偽造の常習犯であり、良心的科学者といったものからは程遠い存在であった。Russell Grigg という人によるウェブサイト「エルンスト・ヘッケル——進化論の宣教者、欺瞞の使徒」(Ernst Haeckel: Evangelist for evolution and

apostle of deceit) によれば、「〈大陸におけるダーウィンの番犬〉とか〈ドイツのハックスリー〉と呼ばれ、エルンスト・ヘッケルは、進化論を流布させるために、いんちき (fraud) にいんちきを重ねた科学者として有名である。(6)」

[しかし] ヘッケルの怪しげな活動の中でも、最も有名な、あるいは最も悪名高いのは、人間の胚は他の哺乳動物と同じく、最初、魚のような鰓を持ち、やがてサルのような尻尾を持つ一連の段階を経過するのだという、全く誤った説を流布させたことである。

これによると、ヘッケルは二人の他の科学者による胚の絵を、詐欺的に改変して例の胚の絵を偽造し、著書 *Natürliche Schöpfungsgeschichte* (The Natural History of Creation, 1868) に載せたのだが、当時ライプツィヒ大学の有名な比較発生学者であった Wilhelm His によってこれを暴露された。これによってドイツ科学界の憤慨があまりに大きくなったので、ヘッケルは黙っていられなくなり、1909年1月9日付のミュンヘンの新聞 *Münchener Allgemeine Zeitung* に次のような投書をして偽造の言い訳をした (英訳からの翻訳) ——

「私の胚の絵のわずかの部分 (おそらく 100 のうち 6 つか 8 つ) は実際に (Dr. Brass = 糾弾者の一人 = の言う意味で) 「偽造された」ものである。すなわち見せしめに指摘された例は、あまりにも不完全か不十分なので、つながった発達の経路を復元するには、仮説によってギャップを埋め、比較的総合によって欠落を再構築するほかないので、そのようにしたものだ。この仕事がいかに困難であるか、図工者がどれほど失敗をしかねないものであるかは、発生学者にしか分からないことだ。」

Grigg は、「ヘッケルが手を加えたイヌと人間の胚の絵を、オリジナルと比較してみれば [比較写真が出ているがここに採録はしない]、ヘッケルの告白そのものが事実をいつわったものであり、本質的にこれは、彼の恥ずべきニセモノ作りを正当化し、永続化しようとする試みであることが分かる」と言っている。Günter Rager によれば——

「ヘッケルは自分の闘争のためには手段を選ばなかった。「生物発生の法則」= 反復説のヘッケルの自称 = の正しさを証明するために、彼はいくつかの図を発表したが、いずれもそのオリジナルとキャプションに改変を加えたものだった。」「このいんちきは今、いくつかの例で示されている。この目的のために、彼は同じ版木を 3 回も使用し、それぞれの版画のために違ったキャプションを発明した。」「『生物発生の法則』とは、データを理論に合わせるためにトリックを用いなければならないシロモノだ。」(G. Rager, “Human Embryology and the Law of Biogenesis” in *Rivista di Biologia/ Biology Forum* 79, 1986, pp. 451-52.) (7)

要するにヘッケルは、生存中から学者として資格なしと烙印を押され、反復説はとうの昔に学説としての信用を失くしている。Ashley Montagueによれば――

「反復説は1921年、Walter Garstang教授の有名な論文によって打ち倒された。それ以来、いかなる真面目な生物学者もこの反復説を用いたことはない。」(Montague-Gish Princeton Debate, 4/12/80) (8)

にもかかわらず、これが今日まで真理であるかのように伝えられ、教えられているという不思議なことが起こっている。Griggはこう言って告発する――

反復説を立証しようとする全く不正直でひどく悪辣な根拠と、それが当初から科学的に信用できないものとされてきた事実にもかかわらず、人間は母の胎内で自分の過去の進化を反復するという、この完全に誤った考えは、ごく最近まで学校や大学で進化の証拠として教えられ、今でも多くの通俗的な科学の本に載っているのである。

「ごく最近まで」と言っているが、これは「現在でも」と言うべきであり、「通俗的な科学の本に」と言っているが、そうでなく、ほとんどすべての生物の教科書に堂々と載っているのである。

いったいなぜ、こういう理不尽なことが起こっているのだろうか？「悲しいことに、彼のすべてのおぞましい活動にもかかわらず、ヘッケルはドイツにおいて圧倒的な成功をおさめた」(Grigg)のはなぜか？ マイケル・リチャードソンによれば――

「ヘッケルの偽造告白は、この絵が1901年に *Darwin and After Darwin* という本に使われ、広く英語の生物教科書に載るようになってから、すっかり忘れ去られてしまった。」(Elizabeth Pennisi, Michael Richardson, "Haeckel's Embryos: Fraud Rediscovered," *Science* 277(5331): 1435, Sep. 5, 1997) (9)

いったいなぜ、いったん多くの学者から指弾を受け烙印を押され、根拠なしとして葬り去られたものが、何ごともなかったかのように復活し、それが今日なお学校で教えられているのだろうか？ これは最大級のミステリーというべきものである。

まず素朴な疑問として、正確な胚の写真ぐらゐは教科書に載せたらどうか、教科書たるものが(解釈はどうかであれ)一次資料そのものを改変してどうするのだ、と考えるかもしれない。しかしダーウィン体制下の教科書にとって、それはできない相談である。なぜなら、ヘッケルの絵をリチャードソンの写真に変えたりすれば、肝心の鰓も尻尾も消えてしまう。もともとヘッケルの発生反復説は、人間にも鰓や尻尾を持つ時代があったということを行うために考え出されたものなのだから、それではこの進化論の重要な柱の意味がな

くなる。これは是非ともヘッケルの絵でなければならないのである。

それならこの胚の比較絵は、生物学史上のかつての興味ある説として紹介するにとどめればよいのではないか。勿論それなら我々に文句はない。しかしそれではダーウィニストは承知しない。ダーウィン専制体制下では、これは生きた現実の理論でなければならないのである。

ヘッケルの偽造絵は、個人的な功名心によって学者が捏造したものが、誤って長く教科書に載ったといった話では全くない。それならとうの昔に淘汰されていたはずである。よくニュースで「組織ぐるみの犯罪」という言葉が使われることがあるが、厳密にはそれでもない。それよりもっと恐ろしく根深い犯罪、いわば現代文化そのものの生み出した犯罪と考えるべきである。そのように考えなければこの謎は解けないだろう。

まず、ヘッケルという狂信的ダーウィン支持者が、歴史上どのような働きをしたのかを調べなければならない。キリスト教の伝播にはパウロという人物が不可欠であった。キリスト教は事実上、パウロ教であるとも言われる。マルクス主義が単なる哲学としての域を超えて、政治的イデオロギーとして世界制覇を目指すにはレーニンという人物が必要であった。これをマルクス=レーニン主義 (Marx-Leninism) という。エルンスト・ヘッケルというドイツ人はダーウィン進化論に対して、ちょうどマルクスに対するレーニンの役割を果たしたと言えるであろう。ヘッケルによって、ダーウィニズムは世界制覇の体勢を整えたと言って差し支えない。我々が Darwinism と言っているものは、現実には Darwin-Haeckelism と呼ぶべきものである。ヘッケルという「ダーウィンのブルドッグ」の中のブルドッグがいなければ、ダーウィニズムはおそらくと提出してみただけの学説にとどまって、今あるような神聖不可侵の教義などにはおそらくならなかった。

ヘッケルという男は科学者の仮面をかぶった政治的策謀家であった。その点でも、彼はレーニンに非常によく似ている。レーニンは資本主義という敵を倒すためには、あらゆるウソも謀略も神聖化されると言った。ヘッケルも、彼の信奉する思想的大義のためには、あらゆるウソも偽造も許されると考えたであろう。

こうしたヘッケル像は、これまでに引いた証言からも推測できるであろうが、私の今からの論述が依拠する Richard Weikart, *From Darwin to Hitler: Evolutionary Ethics, Eugenics, and Racism in Germany* (2004)によって明らかである。この本は、ダーウィニズムから社会ダーウィニズム、民族主義 (人種差別)、優生学、といった思想を経てナチズムに至る、ドイツにおける思想の系譜を跡付けたものだが、その中心人物はヘッケルだと言って差し支えない。『ダーウィンからヒトラーへ』は、結びの文章にこう言っている――

ダーウィニズムそれ自体がホロコースト (ユダヤ人大虐殺) を生み出したわけではない。しかしダーウィニズム、特に社会ダーウィニズムや優生学というその変種がなければ、ヒトラーや彼のナチ追随者たちは、彼ら自身とその協力者たちに、あの世界最大の残虐行為の一つが、実際には道徳的に称揚されるべきものなのだ と納得させるための、

不可欠な科学的根拠を持つことはできなかつたであろう。ダーウィニズム、あるいは少なくともダーウィニズムのある自然主義的解釈は、道徳を逆立ちさせることに成功したのである。(10)

ヘッケルにまつわる謎を解くには、まずこの当時、すなわち 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての、世界情勢を考えなければならない。帝国主義、覇権主義、植民地争奪戦争といったものが、この当時の世界の常識であった。ドイツを初めとするヨーロッパ列強は、人種や人間には根源的優劣があり、優者は生き残り劣者は滅びていくのが当然（自然法則）だとする科学理論を、喉から手が出るほどに欲しかったと思われる。それを与えてくれるのがダーウィン進化論であり、特にこれを生物学理論から政治理論・倫理思想（進化論倫理）にまで高めたダーウィン=ヘッケル進化論であった。「政治学とは応用生物学である」とは、ナチスの宣伝によく利用されたヘッケルの名言（？）である。

つまりこの頃のドイツ（のみならず他のヨーロッパ列強）は、詐欺師学者ヘッケルを、英雄として祭り上げなければならない理由があつたのである。つまり帝国主義や人種差別を正当化する科学的根拠が欲しかった。その一環として、あの胚の比較絵があつたと考えられる。この絵の意味するのは、種^{しゆ}というもののけじめは本来ないということである。人間を含めた自然界には、飛躍というものはなく、なだらかな形態の変化（種の移行）があるのみ——これは事実^{じじつ}に反する——というのがダーウィン進化論のエッセンスであり、従つて『種の起源』には、*Natura non facit saltum*（自然は飛躍せず）というラテン語の諺が何度も引かれている。

すべての生物の間に飛躍（質的断絶）はないが明確な区別はある（現にできている）、というダーウィニズムの説明は、人種差別（人種の根源的優劣）思想にとって都合のよいものであつた。ダーウィン進化を証明するためのあの胚の比較絵が、なぜ捏造してまで必要であつたのか、その意味と謎を探るには、ヘッケルの著書『創造の自然史』の口絵に用いられているという、同じヘッケルによるもう一つのショッキングな絵 (11) を見比べるとよい。ヘッケルの本音とヘッケル支持者の本音が見えてくるであろう。

人種とサルの絵

ヘッケルはこの絵に関連してこう言っている——

最も高度に発達した動物の心と、最も発達していない人間の心の間には、ほんのわずかの量的な違いがあるだけで、何ら質的な違いはない。そしてこの違いは、最も低い人間と最も高い人間の心の差よりもはるかに小さい。あるいは、最も高い動物と最も低い動物の心の差よりも小さいと言ってよい。(12)

こういった発言は、百年を経た今日の我々には、あまりにもショッキングで非常識に聞こえるが、当時としてはそれほどでもなかったのであろう。当時の他のドイツ知識人のいくつかの発言を、ここに示しておく――

[白人優越論] 白人すなわちコーカサス人種は、地球を支配するように定められている。これに対してアメリカ原住民、オーストラリア原住民、Alfuren、ホッテントットといった最も低い人種は、大股に破滅へと向かいつつある。(Ludwig Büchner) (13)

[絶滅戦争の肯定] 科学者は自然から正しい結論を引き出している。すなわち戦争、そして特に絶滅の戦争は――なぜなら自然界の戦争はすべてそれだから――自然の法則であり、それがなければ生物の世界はこのような状態になっていないだけでなく、全く存在を続けることもできないということだ。更に、科学者はこの確信から一歩進んで、この普遍的な絶滅の戦いが有益な効果を持つようにすることを、研究の目的としなければならない。(Gustav Jaeger) (14)

[スペインの南米原住民虐殺を弁護して] これこそが歴史の過程である。もし我々が地質学者の――そして現実にダーウィン理論を受け入れる地質学者の――目をもってこれを見るならば、この人間の種族の消滅ということは、かつて重要でない動物や植物が消滅したように、自然の過程なのである。」(Oscar Peschel) (15)

[優生学=劣者処分] 生まれて以来ずっと精神的にも肉体的にも役に立たず、自分自身にとっても重荷でしかない人間、何ら価値のない人間を養育することは、人類にとって全く無益な、実際のところむしろ有害な所業である。(ボン大学教授 Hugo Ribbert) (16)

優生学は、例えば劣等人間の強制的断種のような形で、当時のヨーロッパで真剣に考えられていた方法であるが、この最後の Ribbert 発言にみられる極端な優生学思想に近い考え方が、ヘッケルにもあったことを『ダーウィンからヒトラーへ』は明らかにしている。

こうした 20 世紀初頭のドイツ知識人の考え方は、我々には恐ろしいものとして感じられ、現に恐ろしい思想なのであるが、彼らは悪を勧めていたのではなく、むしろこれを、ダーウィン進化論という自然法則にかなった善なる思想として意識していたことを忘れてはならないだろう。Evolutionary ethics (進化論倫理) という言葉に明らかなように、彼らにとって善とは、進化の法則に従うこと、あるいは進化の法則の実現に協力することであり、その進化とは、精神を持たぬ、物質的な盲目的な力の自動作用であった。民族抹殺にせよ優生学にせよ、それは人類全体を向上させ、より健康体にするための、進化の法則にかなった方法であった。「健康」というのが、ニーチェの思想でもそうだが、当時のドイツ思想界のキーワードであった。

ヘッケルが当時のドイツの思想界の中心的存在であったことは、彼が 1906 年に **Monist League** (一元論者連盟) というものを結成し、これを指導したことから分かる。ワイカートによれば――

Monist League の主たる目的は、宗教的な二元論的な世界観――その攻撃対象は第一にキリスト教とカントの哲学であった――を、一元論的な世界観に置き換えることであった。進化論に基づいた自然主義的倫理が、この一元論的世界観の中で特に注目されるものとなった。…その機関紙創刊号に載った基調論文は、この連盟の最も重要な存在理由の一つが、青少年のための世俗的道德教育を促進することにあることを明らかにしている。(17)

この場合、一元論とはむしろ唯物一元論のことである。この連盟にはかなりの会員がいたようであるが、このように理論武装をし、青少年教育の使命感を持った組織の指導者として、ヘッケルが君臨したという事実を、我々は見逃すことはできない。

Monist League の勢いは第一次大戦後、1919 年のヘッケルの死とともに衰えたようである。しかし、政治思想家ヘッケルとダーウィン=ヘッケル進化論は、当時のドイツのみならずヨーロッパ列強によって必要とされたのであり、それは、ナチズムも植民地も過去のものとなった今日なお、必要とされていないと断言できるだろうか？ 私はアメリカの ID 理論派とダーウィニズム体制側の論争(むしろ闘争)を何年も前から観察しているが、ダーウィニズム体制側のおのれへの批判者に対する異常な敵意に、それを感じる。それは明らかに学問のレベルを超えた政治思想である。現存の学者の名を出すのは穏当でないかもしれないが、私にはヘッケルと、ダーウィニズム側の総帥というべきリチャード・ドーキンズが重なって見える。

Monist League の哲学、すなわちダーウィン進化論という「科学」に、自分たちの世界制覇の倫理的根拠を見出そうとする野望のようなものは、今日も暗流として生きているように思える。ヘッケルの胚の偽造絵が、咎められることもなく、延々と教科書に生きつづけているという驚くべき理不尽の背景には、**Monist League** の亡霊の圧力が働いているとしか考えられないのである。

統一思想は、もともと共産主義の理論武装を破るための理論として性格が顕著だと言えるだろう。統一思想は、ダーウィン=ヘッケル進化論を打ち破る理論でもあり、統一思想以外に、その十分な能力を持った思想体系はないと思われる。まず、ヘッケルの唯物一元論に対する「一元二性論」。これは冒頭に簡単に説明したが、この説明だけでも、生物が無生物から発生したという教科書記述の愚劣さを打ち破るに十分であろう。

また、「進化論倫理」と言われる一見もっともらしい倫理思想を砕くには、単なる宗教教義や宗教思想でなく、厳密に構成された統一思想の論理体系が要求されるだろう。「進化論倫理」とは、人類全体の「健康」をはかるという思想だが、どうなることが人類の健康な

のか、「健康」の定義は唯物一元論などから出てきようがない。ここにも統一思想が要求される。

「優生学」とは、人為的に人間社会をコントロールして優秀な種^{たね}だけを残す、劣等種は場合によっては消えていただく政治的処方を考えるものであるが、今この概念は影をひそめたとはいえ、我々の文化は、これを自信をもって否定するだけの哲学を持たないではないか。今でも、こうしたダーウィン=ヘッケリズムの亡霊に支配されている輩はいくらでもいる。こういった問題に対しても、統一思想は明確な解答を持っている。「個性真理体」という明確にして重要な概念、「個体目的」と「全体目的」の調和的な関係概念などである。そもそも、ダーウィン=ヘッケル進化論の歴史的意味も、統一思想体系に照らしてこそ明らかになるのである。